

みんなのクォーターリー

第83号

Summer 2026

音楽で心と心をつなぐ

MIN-ON quarterly

共創のパートナーへ
—文化芸術とメセナ活動の現在地—

山梨絵美子
(千葉市美術館館長／日本博物館協会会長)
妹尾美穂子
(企業メセナ協議会事務局長)

すべての子どもに良質な音楽を
「こども音楽フェスティバル」の取り組み
金川文彦(ソニー音楽財団顧問)

焼け野原から
『すべての人』の音楽へ
戦後日本の文化政策と劇場の歩み(第2回)
大澤寅雄
(文化コモンズ研究所代表、上席主任研究員)

文化が響き合う社会を
ここから



Min-On quarterly Summer

Contents

● 本誌についてのお問い合わせは
（一財）民主音楽協会
● 本誌掲載記事および写真の無断転載を
禁じます

編集・発行 一般財団法人 民主音楽協会
発行人 山口浩二
編集・写真 広報宣伝部
デザイン・制作 ASデザイン株式会社
2026年7月5日発行

INTERVIEW

> 6-7

すべての子どもに良質な音楽を
「こども音楽フェスティバル」の取り組み

連載

> 8

外交官に聞く 78
ハイチ共和国

ルイ・ハロルド・ジョゼフ 特命全権大使

> 3-5

共創のパートナーへ
——文化芸術とメセナ活動の現在地——

連載

> 9

新ひとくち西洋音楽史 46
ヴェルディ

> 10-11

焼け野原から『すべての人』の音楽へ
（戦後日本の文化政策と劇場の歩み）
第2回：物の豊かさ「から」心の豊かさ「へ」？

REPORT 連載

> 12

REPORTS
“地域”と“人”を結ぶ音楽を 次の世代へ
（2026年5月～7月 民音の取り組み）

共創のパートナーへ

—文化芸術とメセナ活動の現在地—

ルネサンス期の王侯貴族から近代の資本家まで、優れた文化芸術の裏には、それを守り資金を提供してきた「パトロン」の存在がありました。やがて、その役割は国

化の推進」「地域連携の強化」なども努力目標として新たに加えられました。

家や行政へと引き継がれ、博物館や美術館は公共財として保護されてきました。

旧来の教育機関としての役割だけでなく、観光や地域振興といった文化芸術の振興拠点としての位置づけが強まっている中で、現在の博物館・美術館の抱える課題、そして文化を支援する企業のメセナ活

2022年、およそ70年ぶりに「博物館法の一部を改正する法律」が成立（23年4月施行）し、地方公共団体や公益法人に限定されていた博物館の登録制度が改められ、株式会社などの営利企業や地方独立行政法人にも登録対象が広がり、「デジタル

動の現状などについて、千葉市美術館館長の山梨絵美子氏と、メセナアワードを主催する公益社団法人企業メセナ協議会の妹尾美穂子事務局長にお話をうかがいました。



山梨 絵美子

Profile

Emiko Yamanashi

千葉市美術館館長および日本博物館協会会長。2026年より、公益社団法人企業メセナ協議会のメセナ活動認定制度「This is MECENAT」の審査委員長および顕彰事業「メセナアワード」の選考委員長を務める。東京大学大学院人文科学研究科博士前期課程修了。専門は日本近代美術史。前職は、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所副所長。



妹尾 美穂子

Profile

Mihoko Senoo

公益社団法人企業メセナ協議会事務局長。2018年に入局し、助成事業、コーディネート事業等に従事。2021年管理部門統括。2024年より現職。慶應義塾大学卒。前職は日本電気(株)。

01
変化する博物館の役割と
直面する「維持」の壁

—山梨さんは2021年に千葉市美術館館

長に就任され、翌年には女性初の日本博物館協会会長にも就かれました。今年は「メセナアワード2026」の選考委員長も務められますね。

山梨 前職が東京文化財研究所でして、文化に対しての支援体制というのがあまり豊かでないというのはずっと感じておりました。しかも私の在職中に、国立機関であったのが独立行政法人化ということになりました。事業の目的・計画というのを明確にして、その達成度を求められるようになりました。それは一方で必要なことであつたとは思いますが。ただ事業現場が自主的に何かやりたいこと、たとえば国際シンポジウムなど主目的にあるもの以外を行いたいといった時には、他のところのご支援をいただかなければ難しかったです。その民間

からのご支援も、やはりバブル崩壊後は難

たものだと思います。

美術館や博物館への期待や評価が高まっ

しくなっています。美術館にまいりまして

から、全国美術館会議や日本博物館協会で

も仕事をさせていただく中で、全国的に現

場がどんどん厳しくなっていくと実感して

おります。

※¹ ICOM(国際博物館会議)は、2023

年の大会で博物館の定義を新たに採択し、

有形・無形の遺産の研究や収集、保存、解釈、

展示に加え、包摂性、多様性、持続可能性、

たものだと思います。

美術館や博物館への期待や評価が高まっ

たことは喜ばしい反面、現場では求められ

る課題に対応する専門人材や予算が足りて

いません。次世代への維持可能性という意

味でも、やはり多様なところからのご支援

同協議会が認定した芸術文化団体の活動に対

する寄付金に税制上の優遇措置が適用される

業メセナ協議会さんとの出会いがございま

した。大学の先輩である仲町啓子さんが

2025年度の選考委員長をされていまし

たので、勉強させていただこうという気持

ように変化したと感じられますか。

妹尾 戦前は事業で非常に成功された方など

が資金提供の面から支え、戦後の高度成長期

には企業はある種のスポンサー的なかたちで

文化を支援してきたと思います。古くは日本

初の私立美術館である大倉集古館(おおくら

しゅうこかん)や、資生堂ギャラリーなどが

ありますね。

大きな変化となるのは91年のバブル崩壊の

影響が大きいです。企業の業績悪化に伴い協

賛金やメセナ活動費が減少していく中、その

企業が持っている技術や、それまでの蓄積を

化していったように感じます。

山梨 文化財修理に使用する和紙の制作に木

灰(きばい)が必要なのですが、武田薬品工

業さんは自社の薬草園である京都薬用植物園

で育てている椿の剪定(せんてい)した枝葉

を大量の木灰を作り、一般社団法人国宝修理

装演師連盟(こくほうしゅうりそうこうしれ

んめい)に寄贈されています。

妹尾 それも企業が持っている技術を活かし

ている例ですね。バブル崩壊後に企業側の新

しい模索(もさく)が始まったことやNPO

から評価されていましたが、2020年のリ

ます。最近の流れとしては、企業側も企画段

が幅広くアートに親しめるさまざまな取り組

みでも注目されています。今後の課題をどの

ように感じておられますか。

山梨 日本の博物館・美術館って8割ぐらい

お金を出すというよりは、一緒に様々なこと

を考えて社会に何か新しい価値を創出できる

つに、資金獲得に応じて行政からの交付金が

減る懸念があります。そこが、自分たちから

外部資金を積極的に取りに行くことへの逡巡

(しゅんじゅん)になります。地域の力や多

様なセクターと連携をして、より開いて、よ

02 資金提供から「共創」へ

03 地域の魅力と本物を届けるために

うかという問題も生じてきます。

改正博物館法には設置者と現場がコミュニケーションをとって、より良い方向を目指すことも謳（うた）っています。ただハコモノ

行政の中で、建てて、ある程度の交付金を持たせて、協働よりも管理をしている中で、現場と設置者の間にだんだん溝が出てくるように思います。一応その地域での中長期計画と

いうのがあって、それに合わせて動いてくださっているはずの行政ですが、国も含めて担当者が2、3年で変わるために現場との意識共有がなかなか進みません。

最近ではゴッホやモネの展覧会など、収益の

望める事業として成り立つものの以外に、なかなか外部資金が呼び込めないんです。80年代も1927年竣工の旧川崎銀行千葉支店を包む「^{※2}鞘堂（さやどう）」構造で建てられています。

それほど収益は望めないかもしれないけれども、これをぜひ紹介したいと美術館が支援をお願いすれば、ある程度実現できたからです。また、日本の円が弱くなって、輸送費にしても保険料にしても今までの2倍のお金がかかる。そうになると、ますます収益が見込めるものばかりになってしまいます。

自館も含めた国内コレクションや地域の文化財の魅力を磨き上げる時期なのかもしれない。80年代以降の建築家さんたちが非常に

せん。



▲地下3階、地上12階建ての珍しいビル型の建築（千葉市美術館提供）



▲内部は昭和2年の建物が保存・修復されている（千葉市美術館提供）

——美術館の建物自体が歴史的建造物を保存し、人々に共有するかたちになっているわけですね。

山梨 これからの博物館・美術館は、コレクションはもちろん、建築としての魅力も含めて、自分たちの企画力でどう活かすかが問われるだろうというふうに思っております。

妹尾 私どもに賛同くださっている企業さんには、「人間が生きていくために芸術文化はなくてはならないものだ」という前提がある一層尽力していきたいと思っています。

山梨 1946年に創設された博物館と博物館専門家のための国際的な非政府組織（NGO）。パリに本部を置き、世界中の博物館の発展や、文化遺産の保護を目的として活動。

※2 鞘堂 歴史的に価値のある建物をそのままの姿で、新しい建物で「包み込むように」保存する建築方式。

貨幣価値だけを評価基準とする時代は、もうそろそろ限界がくるんじゃないでしょうか。自然や世界と自分とがちゃんと折り合って生きていくために、見る力と感じる力に働きかけて、何かしら自分で得（え）ていくことをしています。

すべての子どもに良質な音楽を 「こども音楽フェスティバル」の取り組み

日本におけるメセナの先駆けとして、クラシック音楽の普及や演奏家の支援に取り組んできた公益財団法人ソニー音楽財団。「こども音楽フェスティバル」をはじめ、子どもたちに向けた活動に力を入れる理由はどこにあるのか。



金川 文彦

Profile

Fumihiko Kanagawa
公益財団法人 ソニー音楽財団
顧問。

1983年にソニー株式会社に入社後、海外営業・エンタテインメント事業の経営企画管理およびPlayStationのネットワーク事業立ち上げに貢献。2020年からはソニー音楽財団にて、次世代の子どもにクラシック音楽を通じて感性を育むための多様な教育支援活動に取り組む。

01 コンサートの最中に 泣き出しても大丈夫

——ソニー音楽財団はどのような活動をなさってきたのでしょうか。

金川 私たちの財団は1984年、大賀

典雄（おおがのりお）さんによって設立さ

れました。大賀さんはもともとバリトン歌

手として活躍されていたのですが、その後

ソニー（現ソニーグループ株式会社）に入

社し、当時は同社の社長を務めていました。

早くも翌85年には、財団の取り組みを象

徴する二つの企画がスタートします。一つ

は「0才まえのコンサート」。これは、妊娠中のお母さんをおもな対象とするコンサートで、良質な音楽を聴いてリラックス

スできれば、おなかの赤ちゃんにもきつ

と良い影響があるに違いない、というコ

ンセプトがもとになっています。これは

いまでも多数開催している未就学児向け

コンサート「Concert for Kids」にもつ

ながっています。もう一つの「国際オーボ

エコンクール」は若手音楽家の育成を目的

としており、国内でレベルの高い演奏に触

れられる機会を増やしたい、という狙いも

ありました。

——「子ども」に注目された背景には、どのような思いがあったのでしょうか。

金川 次世代を担う子どもたちに対して、

何らかの貢献をしたいというのが原点です。

加えて、財団を設立した大賀さんがクラシッ

クの出身だったのもあって、幼いときに質

の高い音楽を聴く体験は、情操教育に大き

なインパクトを与えるという強い信念があ

りました。

音楽に関連する国内の財団は他にもいく

つかありますが、子どもを対象とするもの

は現在でも限られています。その意味で私

たちの活動はユニークだと言えますし、経

済的な利益を追求するのとは異なるメセナのアプローチをとってきた意義があると感じています。

——子どもが楽しめるコンサートを開催するにあたって、どのような工夫をされていますか。

金川 まずは親御さんたちの心理的なハー

ドルを下げるのが大事だと考えています。

幼い子をコンサートへ連れて行くこととする

と、途中で泣き出したらどうしようと、誰

しも不安に思うものです。その心配を取り

除くため、授乳室などの必要なインフラを

整えるとともに、「演奏中に泣いても大丈夫



© Naoya Ikegami/SUNTORY HALL

▲ 2025年5月3日～6日の4日間で総来場者数は約33,000人、有料＆無料配信総視聴数は約83,000回を記録した

ですよ」「途中の入退場も自由ですよ」と 1回・第2回となる「こども音楽フェスティバル」を開催されましたね。

金川 約40年にわたる財団の集大成となる 構成についても飽きさせない工夫をしています。 金川 その結果、チケットがほぼ完売するほど

は、質の高い演奏を届けることです。赤ん坊でも小学生でも、音の善し悪しを鋭敏（えいびん）に感じ取ります。良い演奏に触れると、みんな集中して黙るんですよ。

02 チケットはほぼ完売、でも…

——2022年と25年にはサントリー芸術財団サントリーホールと共催で、それぞれ第

金川 約40年にわたる財団の集大成となる 構成についても飽きさせない工夫をしています。 金川 その結果、チケットがほぼ完売するほど

は、質の高い演奏を届けることです。赤ん坊でも小学生でも、音の善し悪しを鋭敏（えいびん）に感じ取ります。良い演奏に触れると、みんな集中して黙るんですよ。

金川 約40年にわたる財団の集大成となる 構成についても飽きさせない工夫をしています。 金川 その結果、チケットがほぼ完売するほど

金川 約40年にわたる財団の集大成となる 構成についても飽きさせない工夫をしています。 金川 その結果、チケットがほぼ完売するほど



▲技術の力で音楽をより身近に

続けていかれるのでしょうか。

金川 おかげさまで採算性もかなり改善することができ、今後数年おきにフェスティバルを開催していく目処（めど）が立ちました。次回開催を目指して、鋭意検討を進めているところです。

財団が主催するコンサートを含む子ども向けコンサートなどについては、無料のスマホアプリ「子育てクラシックナビ」でもご確認いただけます。そのほか、気軽にクラシックを楽しめるコンテンツも財団のYouTubeチャンネルで発信していますので、ぜひ活用いただけると嬉しく思います。



Republic of Haiti


 ハイチ・レクチャーコンサートの▲
 公演ニュースはこちらから

ルイ・ハロルド・ジョゼフ 特命全権大使

ハイチ共和国



His Excellency Mr. Louis Harold JOSEPH

——本年、日本とハイチは外交関係樹立70周年という大きな節目を迎えました。その記念すべき年に、駐日ハイチ共和国大使館と民音の共催により、レクチャーコンサート「ハイチからの詩とリズム」を開催しました。

大使：今回のコンサートは、私たちにとって大変意義深く、心に残るものとなりました。ハイチの音楽家であるアモス・クランジュ氏、ケシタ・クレナール氏、クロード・サチュルヌ氏が、ハイチの豊かなリズムや文化の魅力を存分に伝えてください、会場の皆さまも温かく受け止めてくださいました。さらに、日本の優れたピアニストである曽根麻央氏との共演は、まさに音楽を通じた両国の友好を象徴するものだったと思います。来場された方々からも多くの喜びの声をいただき、大使館としても、今回のコンサートは大きな成功であったと感じています。

——今回のコンサートでも、ハイチ音楽の豊かなリズムや多彩な文化的背景が感じられました。ハイチ文化の魅力や特徴についてお聞かせください。

大使：ハイチの文化は、音楽や食文化をはじめ、さまざまな魅力にあふれています。アフリカ、フランス、スペインなどの影響を受けながら、それらが重なり合い、ハイチならではの豊かな文化が育まれてきました。中でも大切なのは、ハイチがカリブ地域の中でも、アフリカ文化を色濃く受け継いでいる国の一つであるということです。ハイチ音楽を聴いていただくと、その力強いルーツを感じていただけると思います。今回のコンサートでも、クロード・サチュルヌ氏の太鼓の響きには、アフリカを思い起こさせる力強さがありました。また、スペイン音楽をはじめとするさまざまな音楽の影響を受けながら、ハイチ独自のリズムや表現として発展してきた音楽もあります。

——大使は、民音が行っている音楽を通じた交流事業についてどのようにお考えでしょうか。

大使：音楽は、普遍的な言語です。今回のコンサートでも、両国の音楽家が、短い時間の中で心を合わせ、素晴らしい演奏をつくり上げました。それは、音楽が誰にとっても理解できる共通の言語だからこそ実現したものだと思います。民音が賛助会員の皆様に支えられ、音楽を通して日本と世界の人々の心を結びつけるために文化運動をされていることは、大変素晴らしい取り組みです。外交団としても、こうした民音の活動をできる限り支援していくべきだと考えています。

——最後に、読者の皆さまへメッセージをお願いします。

大使：カリブ地域には多くの国々があり、フランス語、英語、スペイン語など、話される言語も文化も非常に多様です。一方で、日本の皆さまには、カリブについてまだあまり知られていない部分も多いと感じています。だからこそ、ハイチをはじめとするカリブの文化に触れ、その豊かな多様性を知っていただければ大変うれしく思います。今後、民音がカリブ地域との交流をさらに広げ、日本の皆さまがカリブをより身近に感じる機会が増えていくことを心より期待しています。


 ▲約350名が来場したレクチャーコンサート
 (2026年5月31日、赤坂区民センター区民ホール)

※19世紀イタリア・オペラの最高最大の作曲家は、ジュゼッペ・ヴェルディ(1813〜1901)です。奇しくも同じ年に生まれたワーグナーが「楽劇」を通してオペラの改革を意図しましたが、ヴェルディはイタリア・オペラの伝統を受け継ぎ、それを豊かに発展させました。彼はイタリア・オペラに特有の輝かしいベル・カントと高度な歌唱技術による人声の美に基礎を置き、その上で19世紀後半の写実主義的傾向に応じ、強力な表現力をもったドラマティックなオペラへの道を歩み、ワーグナーと並ぶロマン派オペラの最高峰を築きました。

Classical Music History
新ひとくち西洋音楽史

46

ヴェルディ

石田 一志

彼はイタリア北部パルマ県ブッセートに近い小村レ・ロンコーレに生まれました。幼くして楽才が認められ、地元の商人バレッツィの後援で、1832年からミラノ(音楽院は入学拒否)で、V・ラヴィーニャに作曲理論の個人指導を受けて作

曲家としての下地を作りました。36年にブッセートに戻りオーケストラの指揮者並びに音楽学校の教師となり、後援者の娘マルゲリータ・バレッツィと結婚し作曲にも励みます。38年には最初の歌曲集がミラノで出版され、翌39年2月に家族を伴ってミラノに移り、そして11月にはスカラ座で《伯爵オベルト》(1839)を初演。最初の成功を収めました。しかし、この前後に2人の愛児と妻に死なれ、その悲しみのなかで作った《1日だけの王様》(40)が失敗に終わり、極度の憂鬱(ゆううつ)に陥ります。スカラ座支配人メレッリや歌手のストレポーニ(後に再婚)らに励まされ《ナブッコ》(42)を作曲。その愛国的内容がオーストリア圧政下(あつせいか)にあったイタリア人に強く訴えかけ、大成功を収めます。初期のヴェルディのオペラには祖国統一をめざすイタリア民衆を鼓舞(こゑん)する

※ぶ)するような合唱の革命歌がふくまれており、彼の名前の綴りが「イタリア王ヴィットリオ・エマヌエーレ Vittorio Emanuele Re d'Italia」の頭文字を連ねたものであったため、ヴェルディはイタリア統一運動の合言葉にさえなりました。

世界的な成功をもたらした《リゴレット》(51)を転機に、ヴェルディの創作に変化が現れます。人間の内面の追求がテーマとなるわけです。ここでは腐敗した16世紀の宮廷を舞台に、愛する娘を奪われ、殺される道化役リゴレットの悲劇が強靱(きようじん)な性格描写によって描かれています。この中期には、さらに《トロヴァトーレ》(53)、《椿姫》(53)、《仮面舞踏会》(59)、《運命の力》(62)、《ドン・カルロ》(67)といった名作が続きます。

※その後、比較的寡作(かさく)となりますが、1869年のスエズ運河の開通を記念して建設されたカイロの劇場で71年に《アイダ》が初演され、さらに晩期にはアリゴ・ボーイト(1842〜1918)の台本でシェークスピアの悲劇《オテロ》(87)と喜劇

《ファルスタッフ》(93)という不朽の名作を書き上げました。

ヴェルディの名声はすでに初期に確立されたといえますが、作曲家としては大器晩成型の天才で、彼の芸術が真の充実を示したのは30代終わり近くになってからでした。そしてオペラのあらゆる醍醐味(だいごみ)を味わわせる《アイダ》、美しく豊かな音楽と特別な劇的緊迫感をもった《オテロ》、自由奔放(ほんぽう)な筆致(ひうち)で主人公の人間像を描いた《ファルスタッフ》でその芸術を完成させました。なお、74年に作家マンゾーニの死を悼(いた)んで作曲した《レクイエム》は、オペラ以外の、ヴェルディの輝かしい成功作として知られています。これは、いわば宗教的オペラともいえるもので、オペラの本質的なものを宗教音楽に移植したと言えます。



似顔絵イラスト：
小澤一雄

焼け野原から『すべての人』の音楽へ （戦後日本の文化政策と劇場の歩み）

第2回…物の豊かさ「から」心の豊かさ「へ」？



大澤 寅雄

Profile

Torao Ohsawa

1994年、慶應義塾大学卒業後、シアターワークショップにて公共ホール・劇場の管理運営計画や開館準備業務に携わる。2003年、文化庁新進芸術家海外留学制度により、アメリカ・シアトル近郊で劇場運営の研修を行う。帰国後、NPO法人STスポット横浜の理事および事務局長、東京大学文化資源学公開講座「市民社会再生」運営委員、ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室主任研究員を経て2023年4月に文化コモンズ研究所を設立、代表・主任研究員に就任、2026年4月から上席主任研究員。

01

政策としての「心の豊かさ」と 「文化の時代」の幕開け

内閣府が実施する「国民生活に関する世論調査」に「あなたは、今後の生活において、心の豊かさやゆとりのある生活をするに重きをおきたいとお思いますか。それとも物質的な面で生活を豊かにすることに重きをおきたいとお思いますか」という質問がある。「物質的にある程度豊かになったので、これから心の豊かさやゆとりのある生活をするに重きをおきたい」「まだまだ物質的な面で生活を豊かにすることに重きをおきたい」という選択肢により「物の豊かさ」と「心の豊かさ」の重視の割合を比較しており、1979年以降は「心の豊かさ」が「物の豊かさ」を上回り続けている。この調査結果は、前回（第1回…戦後復興から高度経済成長への熱気）で紹介した、1980年に設置された大平首相の諮問機関（しもんきかん）である田園都市研究グループが報告書での結論、すなわち「今日、物質的生活の豊かさのなかで、国民は、量から質へ、物質的なものから精神的・文化的な価値の高いものへと、個性的で円熟した生活の質を求めはじめ、多様な文化活動に対する欲求が増大しつつある」という考察の裏付けのデータなのだろう。

高度経済成長を走り続けていた1980年代以降、「心の豊かさ」という5文字は文化振興の「常套句（じょうとうく）」となった。当時はまだ国の文化振興の理念を謳（うた）う法律がなかったが、1983年に秋田市と東京都が文化振興条例を施行し、「文化の時代」と「地方の時代」がともにやってくる。秋田市文化振興条例の前文に「さわやかな公園都市をめざす秋田市民は、同時に真と美をた。1986年、東京の赤坂にオープンしたサントリーホールは「文化の時代」の象徴と呼べるだろう。それ以前は日本になかったワ

地に公会堂、市民会館、文化会館の建設が広がっていった。ただし、80年代に整備されたのはコンサート専用の施設ではなく、市民の集会、講演会、様々な分野の発表会に対応できる多目的ホールがほとんどだった。

02

サントリーホールの衝撃と 企業メセナ

その中で民間企業が象徴的なホールを作った。1986年、東京の赤坂にオープンしたサントリーホールは「文化の時代」の象徴と呼べるだろう。それ以前は日本になかったワインヤード型（舞台を囲む段々畑のような客

席形状)のホールは、音響の良さだけでなく、音響の良さだけでなく、

見た目の美しさで人々を圧倒し、それまでのクラシック音楽の真面目で堅苦しいイメージを刷新した。また、クラシック音楽が使われ

るテレビCMが急増したのも80年代で、洋酒、自動車、食品、医薬品など、誰もが知る名曲

もあれば知る人ぞ知る隠れた名曲もCMで使われ、その楽曲、作曲家、演奏家が「ブーム」

となるような現象も生まれた。

1990年代になると、ハード整備が先行してソフトが充実していないまま濫立(らんりつ)する公立の文化施設に対して「多目的」ホールは「無目的」という批判が各

地で起きた。その後、地方にもクラシック音楽の専用ホールや舞台芸術の専用劇場が整備

されるようになり、芸術監督制度の導入やプロデュース公演など意欲的な文化事業も増え

た。代表事例として、水戸芸術館(1990年開館)、愛知芸術文化センター(1992年)

、静岡県舞台芸術センター(1997年)などが挙げられる。一方、民間では企業による芸術文化活動の支援の活性化を目的にした

企業メセナ協議会が1990年に設立され、ホールや劇場を設置したり、公演タイトルに

企業名や商品名を冠する、いわゆる「冠公演(かんむりこうえん)」が都市圏で開催された

りするようになる。

03

真の「心の豊かさ」とは？消費社会の記号としての文化

こうした1980年代から90年代の流れを俯瞰(ふかん)すると、「物の豊かさから

心の豊かさへ」という大きな流れが生まれたと言えるのかもしれない。だがしかし、踏み

とどまって考えたいことがある。国民生活に関する世論調査の「心の豊かさ」の選

択肢は「物質的にある程度豊かになっ

たので、これからは心の豊かさやゆとりのあ

る生活することに重きをおきたい」とある。

この文章は、あたかも「物質的な豊かさを抜きにして心の豊かさはあり得ない」という前提があるように読めるのだ。しかし果たして

そうなのだろうか。このバブル期の文化振興は、国民に「心の豊かさ」をもたらしたのだ

ろうか。音楽学者の渡辺裕(わたなべひろし)は「聴衆の誕生」の中でこのように述べて

いる。「サントリー・ホールの出現によって、音楽会の実体そのものは変わっていないにも

関わらず、『ダサイ』音楽会のイメージが一新されて『オシヤレ』なものになったと

いうこと、そしてそれによって『音楽会で

はなくサントリー・ホールに行く』聴衆たちが増えてきたということ、こういう事態

は、典型的に『消費社会』的な現象である。」

「渡辺裕「聴衆の誕生」(1989年、春秋社)」

消費社会的な現象としての文化振興。それは「心の豊かさ」という常套句をまといな

がらも、豊かさの「記号」としての消費文化を加速し、文化施設の建設という大きな公共

事業を加速した。だとすると、前号で紹介した戦後復興期の「文化の熱気」は、消費社会

という鍋で沸騰する泡を生む加熱のために使われたのだろうか。そして間もなくその泡も消えていくのである。(次号に続く)

《年表》

東京都・秋田市が文化振興条例を施行

サントリーホールが開館

水戸芸術館が開館

企業メセナ協議会設立

愛知芸術文化センターが開館

静岡県舞台芸術センターが開館



REPORTS

“地域”と“人”を結ぶ音楽を 次の世代へ

(2026年5月～7月 民音の取り組み)

ひらく

世界の民族楽器を体験できる 企画展「こどものための 世界民族楽器展」

民音音楽博物館(信濃町)では7月10日(金)より企画展「こどものための世界民族楽器展」を開催します。当館所蔵の民族楽器を直接触り、鳴らすことができる本展示は世界各地の多様性や各楽器の魅力を体験できる機会として活用いただけます。

開催期間:7月10日(金)～9月27日(日)

民音音楽博物館 M3展示室

[火～土] 11:00～16:00

[日・祝日] 10:00～17:00



とどける

ポップス・デュオ カズンの 学校コンサートを 四国の3校で開催

5月26日(火)～28日(木)の3日間、ポップス・デュオ カズンによる民音学校コンサートを高知・香川・徳島の3県で開催しました。

「今こそ歌で旅しよう!」というテーマでカズンの代表曲のほか、世界の歌メドレー、ウガンダの子どもたちと制作した「The Pearl of Africa」なども披露されました。これまでに開催した学校コンサートは4,850校を超えました。



▼ ▼ ▼ ダイジェスト映像はこちら ▼ ▼ ▼



5/26
高知県
南国市公演



5/27
香川県
宇多津町公演



5/28
徳島県
東みよし町公演

むすぶ

ガーナの国民音楽「ハイライフ」 ユネスコ文化遺産登録を 喜び合う歓迎セレモニーを 静岡で開催

6月16日(火)に静岡市清水文化会館マリナートで開催されたサントロフィ公演に先立ち、同会場でガーナ共和国臨時代理大使を招いての歓迎セレモニーを開催。ガーナの国民音楽である「ハイライフ」がユネスコ無形文化遺産に登録されたことを喜び合いました。



探求する

英国・北アイルランド クイーンズ大学で 「平和構築の音楽」テーマに ワールドサミット

民音研究所では、6月9日(火)～12日(金)にわたり、英国・北アイルランドのクイーンズ大学ベルファストにて、第2回「平和構築の音楽」ワールドサミットを開催。民音研究所の研究員に加え、5カ国8名の研究員とともに、「人と社会をつなぐ、平和構築の音楽」をテーマに研究・実践・教育の各分野から議論が交わされました。

サミットの成果については、MOMRI公式サイト「MOMRI Hub」にて、後日公開予定です。

